

かんきつのミカンキイロアザミウマに対する各薬剤の発育ステージ別効果

施設で栽培を行う愛媛県試第28号では、**ミカンキイロアザミウマ**が問題となっており、効果の高い薬剤の選定が求められている。過去の試験では遅効的な薬剤の効果不明であったことから、それらの剤も含めた**発育ステージ別（成虫・幼虫）の薬剤感受性の評価**を行った。

成虫に対する効果

室内試験：リーフディスク上にCO₂麻酔した雌成虫を放飼し、回転散布装置で虫体と葉に薬液を散布。3日後に成虫の生死を判定。



コテツフロアブル及びファインセーブフロアブルの効果は高いが、それ以外の薬剤の効果は低い。

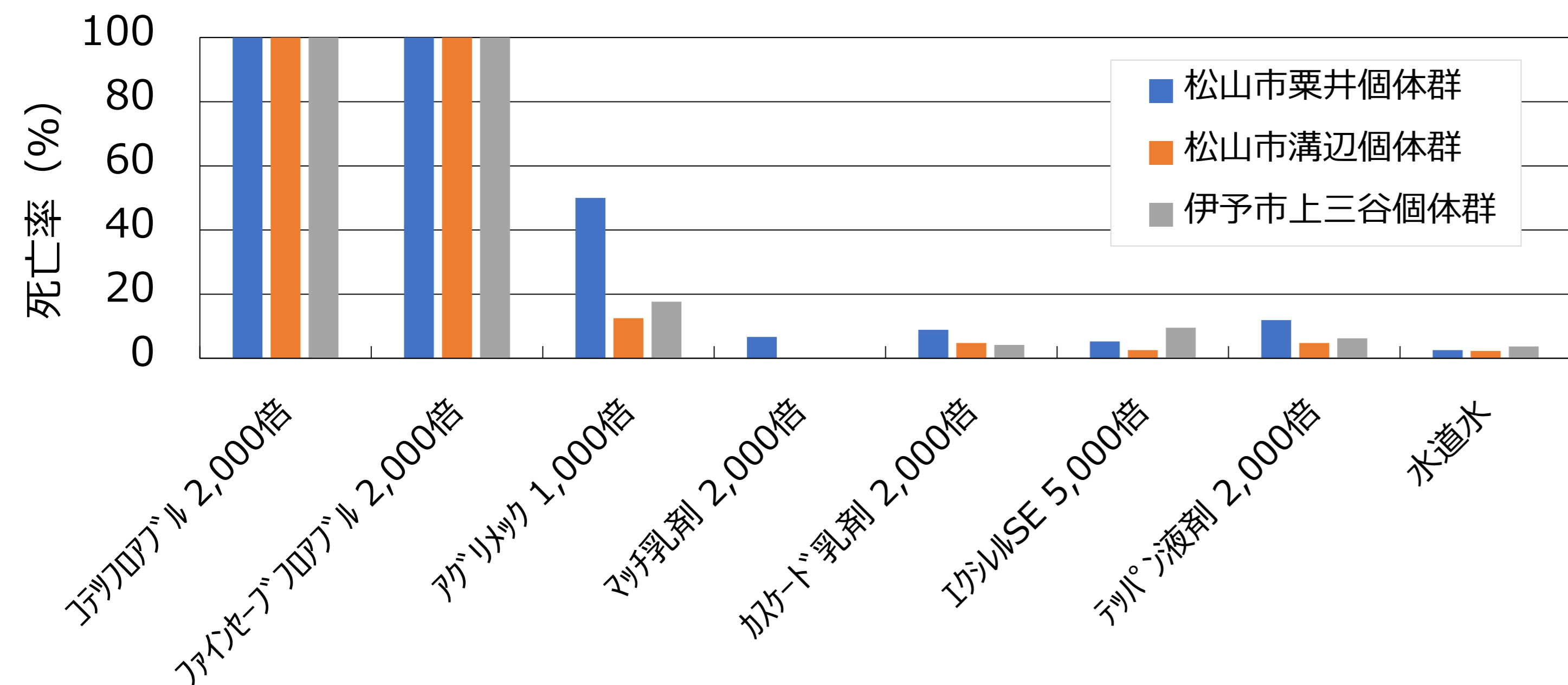


図 成虫に対する各薬剤の殺虫効果 (処理3日後調査)

上記リーフディスクから全ての成虫を除去し、4日後に発生していた次世代の生存幼虫を計数

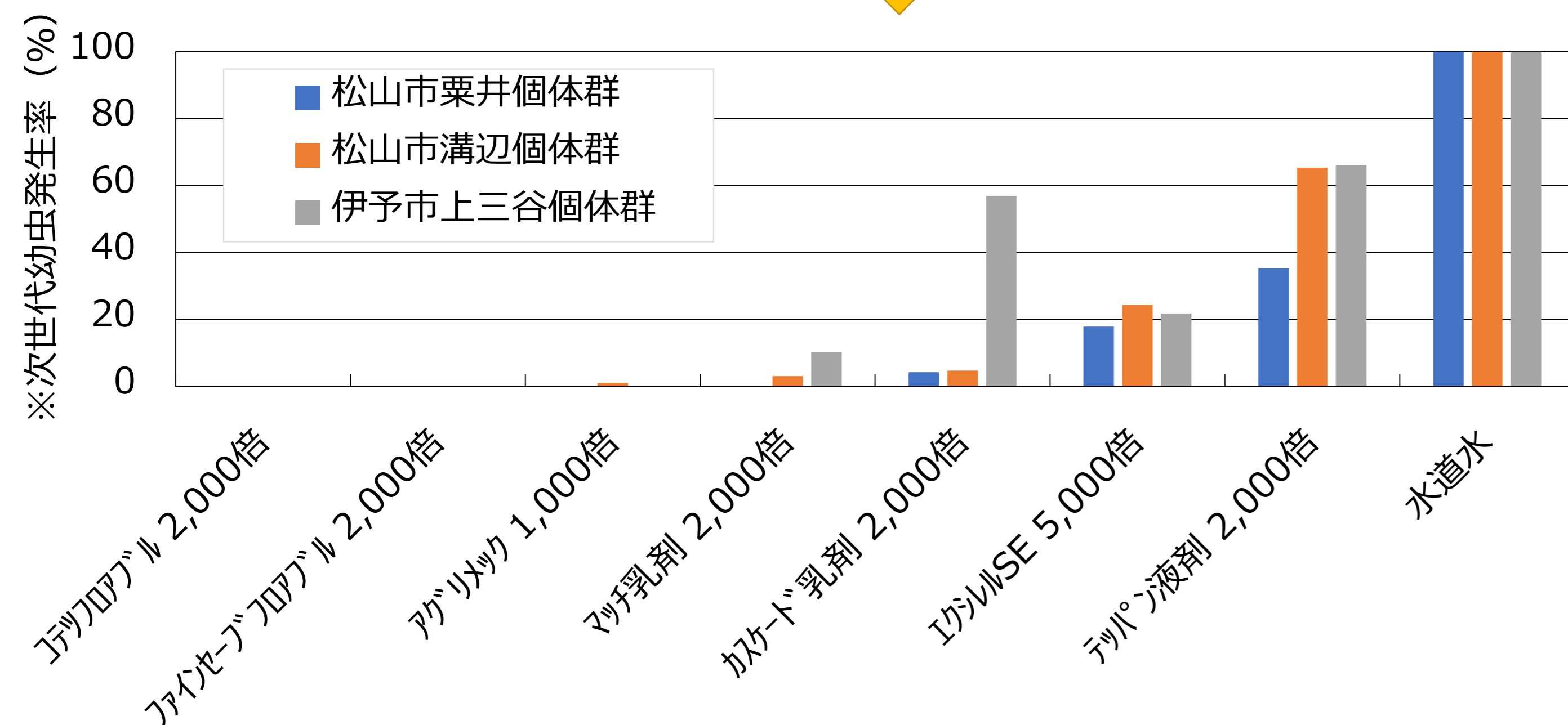


図 各薬剤成虫処理が次世代の幼虫発生数に及ぼす影響 (処理7日後調査)

※各個体群の水道水区の生存幼虫数を100として、各処理区の生存幼虫数の比率で算出

成虫への直接的な殺虫効果が低かった薬剤でも、**次世代の幼虫数を低減させる効果が認められた。**

幼虫に対する効果

室内試験：リーフディスク上に2齢幼虫を放飼し、回転散布装置で虫体と葉に薬液を散布。7日後に生死判定と蛹化・羽化した個体を計数。



成虫に対して効果の高い2剤に加え、**アグリメック、マッチ乳剤、カスケード乳剤**も一定の効果が認められた。

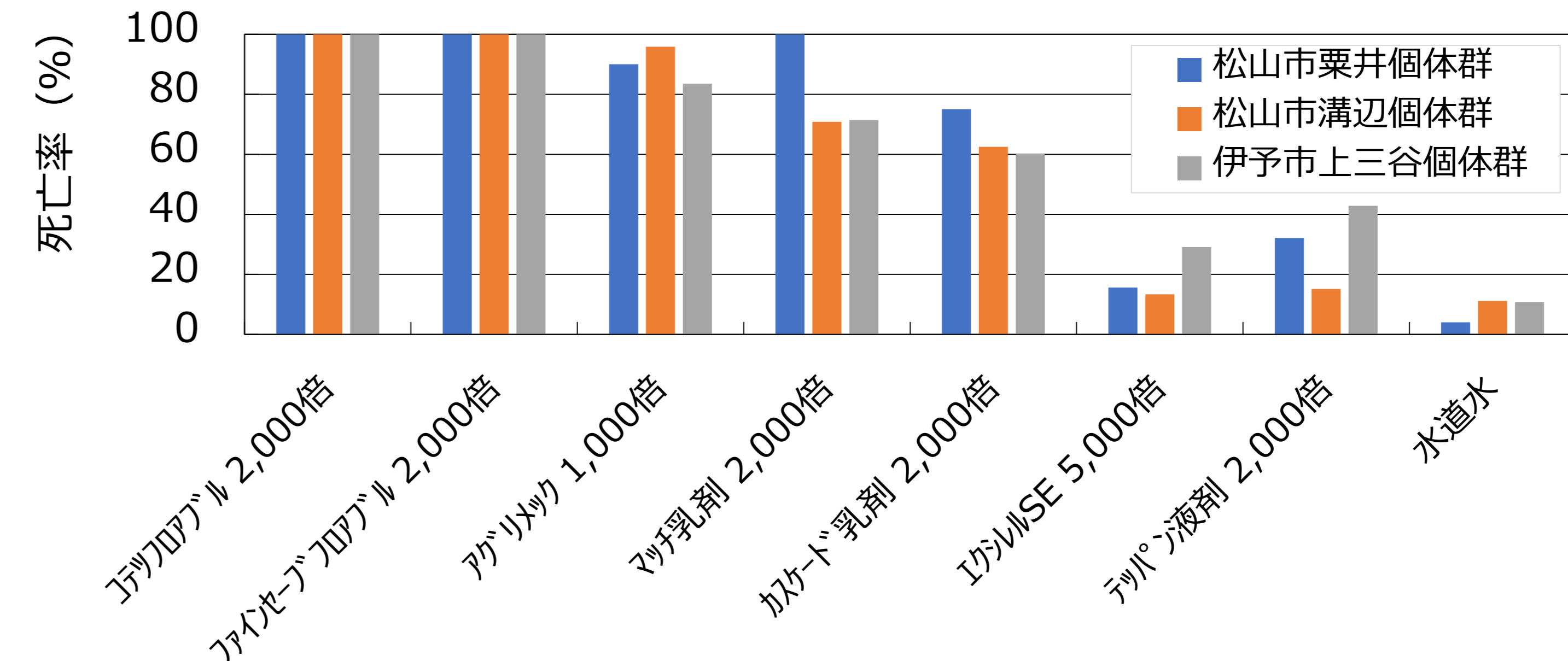


図 幼虫に対する各薬剤の殺虫効果 (処理7日後調査)

生存個体の内、蛹化・羽化している個体を計数

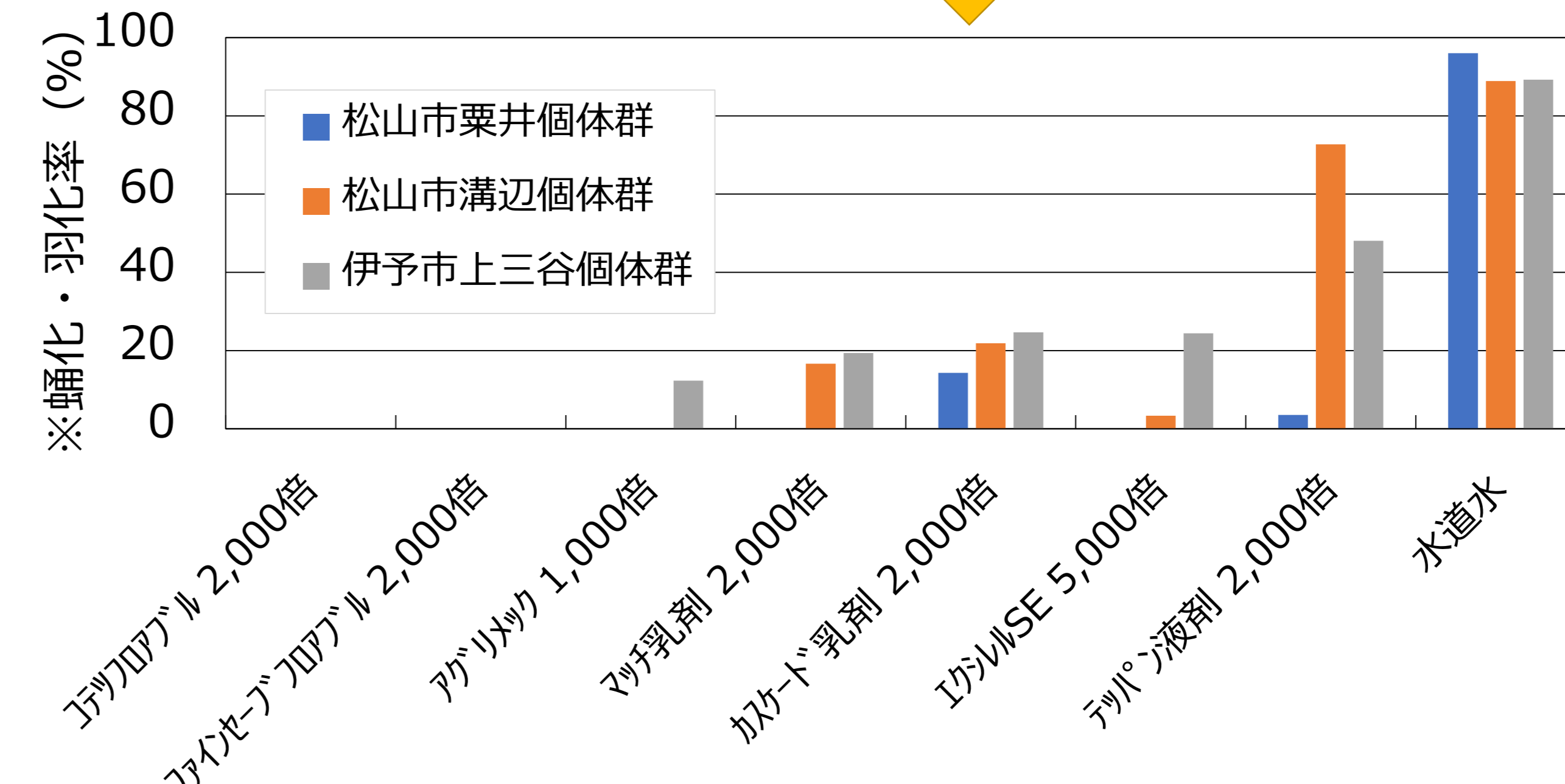


図 各薬剤幼虫処理がその後の蛹化・羽化に及ぼす影響 (処理7日後調査)

※蛹化・羽化率 = (蛹化・羽化個体数) / (全個体数)

上記薬剤に加え、死亡率が低かった**エクシレルSE、テッパン液剤**でも、蛹化・羽化する個体が減少しており、**成虫の発生を抑制する効果**があると考えられる。

IGR系などの遅効的な薬剤は、成虫に対する直接的な殺虫効果は低いものの、幼虫に対する殺虫効果や次世代の密度を抑制する効果が認められたことから、即効的な薬剤と組み合わせて体系的に使用することで、ミカンキイロアザミウマの密度抑制に有効であると考えられた。